

『コール・ジェーン —女性たちの秘密の電話—』

監督：フィリス・ナジー

プロデューサー：ロビー・ブレナー

出演：エリザベス・バンクス、シガニー・ウィーバー

2022年／アメリカ／121分



予告



Amazon プライムビデオ、U-NEXT、
Hulu 等にてデジタル配信中
©2022 Vintage Park, Inc. All rights reserved.

社会を旅する シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

アメリカ・シカゴで暮らすジョイは、刑事専門弁護士の夫と15歳の娘と朗らかで裕福な何不自由ない暮らしを送っていた。しかし2人目の妊娠後、体の違和感が著しく、倒れてしまう。医師によると妊娠が原因で心臓の疾患を生じており、治療の方法は「妊娠をやめる」ことだけだという。ジョイも夫も呆然とする。時は1968年。中絶は違法だった。

ただ、理事会に「治療としての中絶」を求めることができると医師が提言してくれ、それに一縷の希望を託すことに。しかし、理事会は満場一致で反対。出産して助かる確率も50%なら、過去10年間で中絶を認めたのは1度だけだから認めるべきではないとの理由だった。

ジョイは藁にもすがる思いで中絶方法を探す。理事会の承認が下りると聞き、嘘の自殺願望を精神科医の前で語ったり、階段から自ら滑り落ちて流産させた人の真似をしようかと考えたり、闇医者に頼ろうかと迷ったり……。途方に暮れかけたとき、街頭の貼り紙が目に入る。「妊娠？ 助けが必要？ ジェーンに電話を」。書かれた番号に電話をすると、安全な中絶手術を提供するアンダーグラウンドな女性団体「ジェーン」につながる。ジョイはその協力で無事に中絶することができた。

その後ジョイは半ば巻き込まれる形で「ジェーン」の手伝いを始め、女性の送迎や施術中の寄り添いなどから、果ては、無免許ながら中絶施術を行うことにまでなっていく——。



男性ばかりの医療界に阻まれた 中絶を選ぶ権利

アーヤ藍

本作が描く「ジェーン」は実在した団体で、1960年代後半から70年代初頭にかけて推定1万2千人の中絶を手助けしたと言われている。しかも施術により亡くなった人はゼロ。本作はSRHR(性と生殖に関する自己決定権)が作品の軸になっている。たとえば、さまざまなリソースが限られる中、すべての女性を「ジェーン」でも助けられるわけではない。「誰を助けるべきか」という議論は団体内でも常に紛糾する。レイプされた人が経済困窮者か、はたまた恋多き若者か……。そんな時発起人のバージニアは「無作為であるべき。彼女たちの価値を判断しているわけじゃない」とプレない。それは究極の「その人の自己決定権」を尊重する言葉だ。

一方で、同時に医療界におけるジェンダーギャップの問題を感じさせる作品である。ジョイが治療として中絶を求める理事会には男性しかいなかった。ジョイも立ち会っているのに、まるで彼女がその場にいないかのように会話を進め、中絶を認めなかった。中絶の方法を提案してくれた医師でさえ、説明は夫の側を向いてするのだ。まるで「女性には難しい医療のことはわからないだろう」と言わんばかりに。「ジェーン」に協力している若い男性医師も、女性たちの足元を見て高額な代金をふっかける。医療現場にもっと女性がいたら、さまざまな反応や決断がきっと異なっただろう。そしてそれは現代にも続いている問題のはずだ。

あーやあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

